

真鍋廣濟著

王朝文學の代表的女性

真鍋廣濟著

王朝文學の代表的女性

株式會社

湯川弘文社

昭和十六年十二月五日印刷
昭和十六年十二月十日發行

定價壹圓五拾錢

送料十錢

著者

眞鍋廣濟

發行者

大阪市南區順慶町一ノ五三
湯川松次郎
〔會員番號一三七五〇二〕

印刷者

大阪市浪速區稻荷町二ノ九三五
井村雅宥

發行所

大阪市南區順慶町一ノ五二
東京市神田區小川町三ノ二六
湯川弘文社

振替大阪七一二九七
振替東京三五九二〇

配給元

東京市神田區淡路町三ノ九
日本出版配給株式會社

序にかへて

本書は最初から成書を目指して書いたものでは無く、毎月さる雑誌に連載したものに、其後氣附くがまゝに筆を加へ、可成りの増訂をなして出来たものである。従つて或る所では或は重出の已むなきに到つたところも無いでは無いが、それは然るべく諒として戴き度く、また記述の程度も、雑誌に掲載といふことが出發點であつたがために、或は隨筆といふにはやゝ硬味があるかも知られず、さればといつて論攷とか評傳などと題するには自らも烏澁がましく感ぜらるゝ次第なので、名づけて「王朝文學の代表的女性」とした譯である。これが表現の拙劣にもかゝはらず、多少とも教養を深めるといふ心ぐみから讀んで戴けるならば頗る喜ばしく思ふところである。筆者元來淺學菲才、その記述に些かにても誤謬あら

んことをこれ惧るゝものであるが、幸に識者の御叱正を得ば感謝に堪へない次第である。

紀元二千六百一年十月

鳩の湖邊、三保ヶ崎の寓居にて

廣 濟 識

王朝文學の代表的女性 目次

○古今集から……………	一
はしがき……………	一
一、小野小町……………	三
二、伊勢……………	一四
むすび……………	二
○中務の雅懷……………	三
○本院侍従の歌と思想……………	三
○齋宮女御の御ことども……………	三七
○右大將道綱の母と孝標女……………	四〇
○永延より治暦まで……………	八〇

は し が き	八〇
一、和泉式部と小式部内侍	八四
二、紫式部と大貳三位	一〇四
三、清少納言の歌と思想	一三三
四、赤染衛門と江侍従	一四四
五、伊勢大輔の味	一七〇
六、出羽辨のことども	一七八
七、馬内侍の風韻	一八六
八、高内侍といふ女性	一九六
九、加賀左衛門と加賀少納言	二〇一
一〇、左近と右近——附、小左近	二〇七
一一、相模管見	二一九
む す び	二三三

○周防内侍の生涯と歌	二三四
○小馬命婦の風雅	二三三
○一宮紀伊と一宮駿河	二三六
○二條太皇太后宮の女房歌人	二四五
一、二條太皇太后宮	二四五
二、二條太皇太后宮大貳	二四八
三、二條太皇太后宮肥後	二五三
四、皇后宮女別當	二五九
五、二條太皇太后宮式部	二六〇
六、皇后宮美濃	二六一
七、皇后宮右衛門佐	二六三
八、皇后宮少將	二六三

九、太皇太后宮甲斐……………二六四

一〇、二條太皇太后宮堀川……………二六五

一一、二條太皇太后宮攝津……………二六六

○小大進と小侍從……………二七一

○待賢門院の女房たち……………二八八

は し が き……………二八八

一、待賢門院堀河……………二八九

二、待賢門院安藝……………二九五

三、待賢門院新少將……………二九八

四、待賢門院兵衛……………三〇〇

五、待賢門院中納言……………三〇〇

六、待賢門院加賀……………三〇一

むすび……………三〇一

○上西門院兵衛管見……………三〇四

○八條院高倉と八條院六條……………三一

○皇嘉門院とその女房たち……………三九

一、皇嘉門院……………三九

二、皇嘉門院別當……………三二

三、皇嘉門院治部卿……………三三

四、皇嘉門院出雲……………三四

○殷富門院に奉仕した人たち……………三五

一、殷富門院……………三五

二、殷富門院大輔……………三六

三、殷富門院尾張……………三四

○ 式子内親王の御みやび	三三五
○ 宜秋門院丹後と同じく丹波	三四五
○ 二條院讃岐の風韻	三五三
○ 建禮門院右京大夫と時代相	三六一
○ 後に添へて	三七五

王朝文學の代表的女性 目次終

古今集から

はしがき

我が國は昔から言靈ことばたまの幸さきはふ國と稱せられ、言葉の妙用發達著しく、一般の散文の外に、長歌、短歌、旋頭歌、催馬樂、俳句等の文學的形式があり、殊にそのうち目覺ましく發達したのは短歌で古くは文人と言へば歌詠む人と解せられた程であつた。勅命によつて、當時に於ける優れた歌人たちが古今の名歌を集録撰進したことが前後二十一回、それは醍醐天皇の延喜五年（皇紀一五六五）から後花園天皇の永享十一年（皇紀二〇九九）にまで及んでゐる。是等を名づけて勅撰二十一代集と稱し、また早いものから順次に數へて三代集といひ、八代集と呼び、十代集、十三代集とも言つた。その最も古い延喜五年に出來た「古今和歌集」の序文に、數多の歌人のうちから特に選り抜いて六人を舉げ、それに就いて編者紀貫之は次のやうに批評してゐる。

『その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまは得たれども誠すくな

し。たとへば繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し(中畧)。在原業平は、その心餘りて、言葉足らず。しばめる花の色なくて、匂残れるが如し(中畧)。文屋康秀は、言葉は巧にて、そのさま身に負はず。いはゞあき人のよき衣着たらむがごとし(中畧)。宇治山の僧喜撰は言葉幽かにして、はじめをはり確ならず。いはゞ秋の月をみるに、曉の雲にあへるがごとし(中畧)。よめる歌、多く聞えねば、彼此を通はして、よく知らず。小野小町は、古の衣通姫のながれなり。哀なるやうにて強からず。いはゞよき女の惱める所有るに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし(中畧)。大伴黒主は、そのさま卑し。いはゞ薪負へる山人の、花の陰に休めるが如し(下畧)。』

と。即ち遍昭・業平・康秀・喜撰・黒主と、五人の男性歌人のうちに紅一點として小野小町が加へられてゐることは、平安朝の女流歌人にとつては一つの力であり、やがては來るべき平安女流歌人の隆盛を思はしめるものでなければならぬ。

一、小野小町

小野小町か照天てんの姫か。日本美人の典型的存在と言はれる小野小町、「六歌仙」中唯一の閨秀歌人である小野小町、彼女は一體どんな素性の女性であつたか。成程當代切つての歌人ではあつたが父は、母は、その故郷は……………。

小野小町の祖先に關しては古來明確にこれを立證したものは無い。或は參議小野篁卿の孫、小野良實の娘だといひ、或は小野常澄の娘と説き、または小野當澄の子であるとも小野貞良乃至は小野良貞の娘であるとも唱へる人があるが、皆何れも憶説、傳説の範圍を出ない。珍しいのは「三十六歌仙繪卷」の小野宰相常詞といふ文字を都合よく解釋して小野宰相藤原常嗣の娘であると説くものだが、藤原氏説は斷じて荷擔し難い。その生存時代は一般には嵯峨天皇の弘仁六年から醍醐天皇の延喜末年までの百餘年間であるといはれるが、彼女の交友から推察して仁明天皇（深草の帝）の御宇であつたことは確かである。「後撰和歌集」卷十七には彼女が大和の石上寺で、はからずも良岑宗貞少將の出家の姿、即ち僧正遍昭に出逢ひ、寒いから苔の衣（法衣）を貸して呉れといったのに遍昭が貸さぬといつたといふ贈答の歌があり、また小町が文屋康秀に贈つた歌や、小野貞樹・安部

清行朝臣との戀の贈答歌が「古今集」の卷十八、十五、十二などに幾つも残つてゐるのだから、この點更に疑ふ餘地はない。またその出生地に就いては彼女は小野氏であるから、小野妹子卿の後裔が定住した近江國志賀郡和邇村字小野であつたと説く人もあるが、然し「大日本史」をはじめ一般には出羽の國司小野良實（或は良眞）の娘といふことになつてゐる。成程此れはまた小町が美人だつたといふ證明には非常に好都合で、美人系の血統たるアリアン人種の血を受けた出羽の婦人を母とし、同じく美人系の東方漢人系の血液をうけた小野良實を父として生れた小町は定めし美人であつたらう。今日でも秋田美人の名は世間周知のことだが、然し良實の娘としては少々時代が喰違ふ。國司か郡司の娘であつたことは確かで、彼女の一族であり、しかも彼女に戀歌を贈つてゐる小野貞樹は甲斐守になつてをり（「古今集」卷十八）、彼女自身も姉とともに采女（とよめ）郡司以上の地方官から美しい年頃の姉妹を宮中に奉つて、後宮に奉仕せしめたものとなつたことは次の説明で釋然とする。即ち「古今和歌集」を見れば「三國みくにの町」とか「三條の町」とかいふ歌人の作があるが、この町といふのは宮中で高貴な方の御部屋へ通ずる廊下の兩脇に連る幾箇かの女房室即ち女官部屋のとで、此れを町といふと同時に、其處に住む奉仕の女官をも町といひ、或は「つばね町」「うねめ町」「きさい町」等といふのがそれである。従つて小野小町はその姉と共に奉仕してゐたのだか

ら、姉をば「小野の町」と呼び、妹の彼女を「小野の小町」と稱したのである。そして何れの場合でも采女は姉妹で奉仕したのだから、どの町にも姉に對する小町があつた譯だが、そのうち小野小町だけが最も美人であつたので、遂に小野小町がすべての小町の代表語となつてしまひ、しかも姉である「小野の町」までが影をひそめて、「小野の町」とは呼ばれず、勅撰集には「小町の姉」と言はれるやうになつたのである。かう考へると、小野小町には別にその本名があつたことになるが、然しこれに就いては古來殆ど説をなしたものが無いやうで、「古今集目錄」にいふ「比古姫ひこ」説が唯一無二の本名説である。

從來の論評では小野小町こと比古姫は、甚だしい色好みであつたといひ、或は至極貞節な、千古稀に見る淑女であつたともいはれる。彼女を色好みといつたのは鎌倉時代に出來た「古今著聞集」が最初で、此の述作より少し前に出來た「平家物語」までは貞淑な女としてゐるのであるが、「古今著聞集」に至つてはじめて色道にたけた女とするに至つたのは、「色を好む」といふ言葉の意味を取り違へたもので、この言葉は元來は「人情が深い」といふ、よい意味を持つた言葉であり、小町はつまり濡衣を着たわけである。彼女が貞淑であつたことは、その作歌を眺めた時、等しく首肯し得る。

あやしき事いひける人に

結びきと言ひけるものを結び松いかでか君に解けて見ゆべき

などはその一例で、殊に面白いのは「怪しきこといひける人」といふはしがき端書である。平たく言へば、「いやらしい事を言ふ注意人物に」與へた明瞭な脇鐵の歌で、結び松とは、若松を捻ぢて結んだもので、それは成長するにつれて堅く結ばれ、遂には節となつて、解けぬやうになる。小町は他に堅く契つた男がある以上、決して他の男へは靡かぬ強い決心の貞女であつたことが知られる。その契つた幸福な男は誰れであつたか。

傳説によれば美女小野小町は、數多の男性から言ひ寄られたが總べてをはねつけた爲め、多くの人の恨みを買ひ、零落の果ては遂に野仆れ死にをし、野末の枯尾花の下に雨晒しの白骨となつて憐れな路末を遂げたと傳へられるが、それ程小町は貞女であつた。「小倉百首」の、

花の色は移りにけりな徒に我身世にふるなが詠めせしまに

といふ歌は、詞書には「花をながめて」とあるが、無論自分自身の容貌を寓したものである。

しどけなき寝きたれ髪を見せじとてはた隠れたるけさの朝顔

この頃の出鱈目娘に聞かせてもやりたい歌である。貞淑な小町なればこそ詠み得た歌である。女